# 犬の右心房

## 東京農工大学農学部家畜病理学教室出題　第27回獣医病理学研修会提出標本No.477

**動物**：犬，雑種，雄，13歳(1972年4月生まれ)，13.7kg。

**臨床事項**：某開業獣医師の診療を受けていた。その臨床所見の概況によれば，患犬は嘔吐，特に食物摂取直後に吐くとのことであった。また下痢があり，便色は淡かった。触診にて腹部に圧痛があった。血液検査ではアミラーゼ及びビリルビン値の上昇を示していた。

**剖検所見**：心臓は外見上球状に近い形態であった。両側の心室は拡張し，右心室には犬糸状虫約10匹が寄生していた。弁膜装置には特に異常を認めなかった。固定後の心重量は95gで，体重に対する心臓重量比は0.007であった。多量の腹水貯溜が認められた。また胸水の軽度増量，肝臓のうっ血性硬化，脾腫などの所見も認められた。

**組織所見**：提出標本は右心房筋及び前大静脈壁を含む洞房結節領域であり，洞房結節を横断する像を示し，同結節を狭むように両端に栄養血管である洞房結節動脈が存在していた（写真1，トリクローム染色，×78)。洞房結節領域には脂肪浸潤が顕著で，洞房結節は貧弱にみえ，萎小化しており，結節の特殊心筋線維は部分的に脱落しているようにみえた。このような洞房結節領域における脂肪浸潤及び洞房結節自身の変化はヒトでは老人の場合によく観察される所見とされている。

提出標本の問題点は，洞房結節動脈にあった。即ち，内膜の増殖によって管腔は狭小化を呈していた。増殖した内膜は水腫性膨化を示し，多くのマクロファージ由来の泡沫細胞がみられた(写真2，トリクローム染色，×485)。また内膜増殖部分には微細膠原線維と平滑筋線維の増生，及び中膜では走行不整を示す縦走する平滑筋線維周囲に比較的密実な膠原線維の増加がみられた。その他内膜にはワイルダーの細網線維染色で嗜銀性を示し，かつＰＡＳ染色陽性所見を示す細網線維の増量が窺われた。内膜及び中膜における弾性線維の増生は認められなかった。

**組織診断**：膠原線維，平滑筋細胞，マクロファージ，細網線維の出現を示す内膜の顕著な肥厚，及び中膜の膠原線維増生を主とする変化は動脈硬化と位置ずけられ，老犬の洞房結節領域における粥状動脈硬化性変化と診断された。